The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	強敵としての〈太宰治〉 : 『親友交歓』を読む
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	月刊国語教育. 2010, 29(11), p. 58-61
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56980
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

太宰治生誕一〇〇年特別企画 3

強敵（とも）としての〈太宰治〉
―『親友交歓』を読む

斎藤理生
群馬大学教育学部准教授

さまざまな伝記や回想記、あるいは書簡集をひもとくと、現実の太宰治と友情を保つためには結構な労力や忍耐が求められたことがうかがい知れる。しかしあくまで小説の創作主体としての、虚構の〈太宰治〉と仲良くなることは、逆にひどく易しいことのようだ。その小説を読むと、「選ばれたただひとりの読者、太宰の苦悩と真実の唯一の理解者という気持にさせられる」（注1）という感想は、しばしば耳にするところである。

むろん、読み手にそうした錯覚を起こさせる源は、作家の性格や才能に求める前に、まず小説の方法として考えられねばならない。没後六〇年以上を経た現在も、多くの読者が私的に語りかけられている印象を抱くのであれば、そこには相応の仕掛けが働いているにちがいない。近年の研究では、作中に「読者」を登場させ、その「読者」に現実の読み手を近づけてゆく語りの手法を緻密に分析した論考が相次いで発表されている（注2）。

ただし太宰には、そうして作りあげた現実の読み手との蜜月とも言うべき関係を、根底から問い直す小説もあるようである。

一　「親友」としての「読者」

『親友交歓』（「新潮」昭和二一年一二月）は、敗戦直後、故郷の津軽に疎開していた「私」が、旧友を自称する平田という男の来訪を受け、さんざん不快な目にあわされたあげく、去り際に「威張るな！」と言われてしまったという筋の小説である。

「作者」を名乗る語り手の「私」は、このとき平田にどれほどの迷惑をかけられたかを「読者」に訴える。秘蔵のウィスキーを鯨飲し、妻に酌を強要する平田の勝手なふるまいが、当時の「私」の心情と共に「読者」に伝えられてゆく。そこに浮かびあがるのは、平田＝加害者／「私」＝被害者、という実にわかりやすい構図である。

その構図は、「読者」を「私」の「親友」に位置づける役割も果たす。疎開者として周囲に気遣い、妻にも遠慮し、木村重成や

神崎与五郎や韓信を想起して「孤独」というテーマを見出したことなどが記されることで、「読者」はほとんど唯一の理解者の立場へと押しあげられてゆくのだが、何よりも友情を騙られた話が打ち明けられている事実が「作者」の強い信頼を示している。すなわち、「作者」は平田にまつわる愚痴をこぼすことで、「読者」を胸襟の開ける特別な存在に仕立ててゆくのである。

また、「作者」は「読者」との距離を縮めるために、あえて口調を崩してみせる。

私は昨年罹災して、この津軽の生家に避難して来て、ほとんど毎日、神妙らしく奥の部屋に閉ぢこもり（中略）やや贋隠者のあけくれにも似たる生活をしてゐるのだけれども、それ以前の十五年間の東京生活に於いては、最下等の居酒屋に出入りして最下等の酒を飲み、所謂最下等の人物たちと語り合つてゐたものであつて、たいていの無頼漢には驚かなくなつてゐるのである。しかし、あの男には呆れた。とにかく、ずば抜けてゐやがつた。

（傍線は筆者）

唐突に挿入される傍線部のようなくだけたフレーズが、「作者」の内面を垣間見させる。そのため「読者」との間に打ち解けた関係が仮構されてゆくのである。

二　喜劇としての『親友交歓』

現実の読み手は、作中で「読者」と呼びかけられる対象に身をなぞらえつつ読むのが自然であろう。それは『親友交歓』を、「作者」の「親友」として読むことに近い。が、だからといってただ「私」に同情して読むだけでは、「親友」としていささか物足りないし、一篇の魅力も十分に引き出せまい。というのも、次のような部分に注目すると、被害者と加害者とを前述のように簡単に整理できるのか疑わしいからだ。

彼は実に複雑な男であつた。とにかく私は、あんな男は、はじめて見た。不可解といつてもいいくらゐであつた。私はそこに、人間の新しいタイプをさへ予感した。善い悪いといふ道徳的な審判を私はそれに対して試みようとしてゐるのでなく、そのやうな新しいタイプの予感を、読者に提供し得たならば、それで私は満足なのである。

「作者」は平田を裁こうとしてはいない。また、当時の「私」の側にも問題はあった。彼が平田の横暴に「心得顔」で付き合い、「軽薄」かつ「上品なる社交家」として応対したために事態が悪化したことも確かなのだ。いま「私」はそのことを痛感している。だから「作者」となって当時の自分から距離を置いて語ることで、一連の出来事を見つめ直そうとしている。

しかし、やつぱり、事件といつては大袈裟かも知れない。私は或る男と二人で酒を飲み、別段、喧嘩も何も無く、さうして少くとも外見に於いては和気藹々裡に別れたといふだけの出来事なのである。それでも、私にはどうしても、ゆるがせに出来ぬ重大事のやうな気がしてならぬのである。

平田と「私」との関係を、加害者と被害者という単純な図式に落としこむ手前で立ち止まること。そのようなスタンスで読むと、平田も「私」同様、本音を隠し持っていたことが注意される。平田も「抜けめのない社交家」の貌を見せるし、彼はやりたい放題やっているようで、最後に「威張るな！」と言いたくなるだけの鬱屈をためこんでいたのだ。つまり、二人は相似形とし

て捉えられる。虐げられる存在が、虐げる存在と奇妙に似ている。そのことに気づけば、『親友交歓』は悲劇や弾劾ではなく、喜劇のように見えてくるはずだ。

一見この小説は、当時の「私」に深く同情して、平田の横暴に憤って読まれることを欲しているように映る。「強姦」という言葉を持ち出して感情を煽ることさえあるゆえに、そうした直線的な読みは十分に想定される。が、そのとき先に引用したような、平田という存在の位置づけに迷う「作者」の態度は背景に退けられてしまう。それに対して、「作者」が過去の自分を相対化していることを踏まえると、彼が「私」と平田との類似性をちらつかせることで、喜劇的状況を「読者」に示しているのがわかる。双方が被害者であり、加害者でもある世界。理解を超えた性格について振り返っていたら自分に似た表情が浮かんできたという皮肉。そうした構造の読みとりは、素朴に感情移入するよりもハードルが高い。それだけに見抜けたとき、現実の読み手は「作者」の理解者として、いっそう「親友」めいた結びつきを覚えられる。

が、右のような読解を経て末尾にいたると、読み手は「作者」の苦笑に付き合う「親友」という特別な地位を保ち続けられなくなるようなのだ。

三　「威張るな！」の射程

けれども、まだまだこれでおしまひでは無かつたのである。さらに有終の美一点が附加せられた。まことに痛快とも、小気味よしとも言はんかた無い男であつた。玄関まで彼を送つて行き、いよいよわかれる時に、彼は私の耳元で烈しく、かう囁いた。

「威張るな！」

平田の傍若無人な態度には明らかに「意識的な努力」が含まれていた。そのため別れ際に発した囁きには、かえって本心がにじみ出ているように読める。しかもここで小説が終わる。威張っていたはずの平田が威張られたと感じた理由の解釈は、読み手に委ねられてしまうのだ（注3）。

平田はなぜ「威張るな！」と言ったのだろうか？

第一に考えられるのは、このときの「私」の「社交家」ぶりが鼻についたという理由である。あえて挑発をしても暖簾に腕押しで、幼いころの喧嘩相手と口論さえしてくれない「贋隠者」ぶりが不満だったという解釈である。

しかし、平田の発言をもって小説が終わっていることは、この烈しい囁きが、語り手を絶句させたことを意味しているとも考えられる。つまり平田の発言は、「私」のその場におけるふるまいのみならず、後に小説化することをも批判していたとみる解釈である（注4）。旧友が「文学者」であることにひどくこだわり、「敏感に、ふつと何か察するらしい」平田は、後で一方的に小説のネタにされてしまう怖れを感じていたのではないか。実際、津軽での幼なじみの邂逅は、方言を用いずに綴られている（注5）。「作者」は、全国に住まう「読者」に配慮して標準語に翻訳したのだと考えられる。なるほどそれは、平田個人ではなく「新しいタイプ」を描こうとしていた「作者」にとって自然な手続きであった。しかし代償として平田の〈声〉は抑圧されたことになる。

「作者」は当時のみならず、現在のふるまいも批判されていることに気づいて言葉を失う。もっとも、衝撃を受けているにせよ、平田の発言を以て一篇の幕を下ろしたのも彼である。だから、批判は「読者」にも向けられている、と解釈する余地はある。花田俊典は「威張るな！」が、「「私」

の巧みな語り口にのせられてこの男をときどき見かける困り者くらいにあしらって（中略）やっかい者払いをはやくすませたいと願っている読者の優越的で不遜な対人関係意識を撃っている」と指摘している（注6）。かつて平田が「私」に放った言葉が、いま「作者」によって「読者」に差し出されていること。その連鎖は、「読者」も平田と「私」との関係に巻きこまれ、「作者」のよき理解者という第三者的立場に安住していられなくなることを意味するだろう。

重要なのは、どの解釈が正しいかという判定ではない。「威張るな！」の宛先が不明で、「作者」も口を閉ざすがゆえに、その烈しい囁きの余韻に耳をすませばすますほど、読み手は複数の解釈のただ中に放りこまれる構造になっていることだ。冒頭から明確に設定されていた現在の「私」＝「作者」と「読者」／当時の「私」と平田、という次元の区別が、末尾で不明瞭になる。そのため「作者」も「読者」も、当時の「私」や平田と地続きの場所に導かれる。すると、語ってきた次元に語られてきた次元と同じ問題が見え隠れする。「作者」が語ってきたことは、裏を返せば威張っていたことに他ならない。一方、「読者」およびその位置に身を寄せてきた現実の読み手は、「私」にもてなされて「親友」を気取っていた点で、自分と平田が意外に近いことを思い知らされる。いわば喜劇の観客から、登場人物の一人にさせられるのである。

没後六〇年、さらに生誕一〇〇年を迎え、同時代的共感をもって人としての太宰とつながろうとするかつてのような読み方は、今後は難しくなってゆくと予想される。しかし時間的なへだたりは、小説を対象化しやすくするという利点もある。語りに誘われつつその誘いの手つきを見極めたり、微細な表現の奥行きに目を凝らしたり、構造や方法を意識した読みをすることで、親しげに呼びかけてくる類の小説が、意外にしたたかで手強い、複雑な仕組みを持つことも明らかになるはずだ。それは馴れ合いの対象ではなく、強敵と書いて「とも」とルビを振りたくなるような、入り組んだ小説の創作主体としての〈太宰治〉に出会う読書なのである。

［注］

1　奥野健男『太宰治論』（新潮文庫、昭和五九年六月）

2　小森陽一氏「人称性のゆらぎ―太宰治と語り―」（『文学』平成一〇年四月）、松本和也氏「語りかけるテクスト―太宰治「カチカチ山」」（『國文學』平成二〇年三月）、平浩一氏「生成する〈読者〉表象―太宰治「道化の華」の位置」（『日本文学』平成二〇年一二月）など。

3　末尾の解釈については以下の論も参照されたい。大國眞希氏「太宰治「親友交歓」論」（『昭和女子大学大学院日本文学紀要』平成一〇年三月）および「不完全な合わせ鏡　太宰治「親友交歓」論―芥川龍之介「袈裟と盛遠」を視座として―」（『日本文芸学』平成一〇年三月）、細谷博氏「〈招かれざる客〉の造形―太宰治「親友交歓」と「黄金風景」そして「饗応夫人」―」（『南山大学日本文化学科論集』平成二一年三月）

4　「威張るな！」と作家が書くことの罪との関係は、高橋源一郎氏「威張るな！」（『文学じゃないかもしれない症候群』朝日文芸文庫、平成七年一〇月）に示唆を得た。

5　津軽弁の消去に関しては、井上諭一氏「『親友交歓』【研究展望】」（『太宰治全作品研究事典』勉誠社、平成七年一一月）および細谷氏前掲論も参照されたい。

6　花田俊典「太宰治の弁証法」（山内祥史・笠井秋生・木村一信・浅野洋編『二十世紀旗手・太宰治―その恍惚と不安と―』和泉書院、平成一七年三月）

さいとう・まさお

一九七五年生まれ。大阪大学大学院文学研究科修了。博士（文学）。太宰治の小説の研究を続けている。二〇〇九年六月に松本和也氏と共編で『新世紀　太宰治』（双文社出版）なる研究論集を刊行。